

## 小学生の保健室利用と学校生活適応および自己意識との関連

田邊 敏明・織田 優子

The relationship between visits to the school clinic, adaptation to school life and self-awareness among primary school children.

Toshiaki, TANABE · Yuko, ODA

(Received September 28, 2001)

This study investigated the connection between the number of times primary school children visited the school clinic and the level of their adaptation to school-life and of their self-awareness.

The tests were carried out on 179 primary school children using scales of adaptation and self-awareness carefully selected by two primary school teachers.

The following results were obtained.

The less pleasant the children found their experience of school-life and the more negative their feelings about themselves became, the more often they visited the school clinic for no good reason. In proportion as their sense of cheerfulness increased, so did the incidence of their visits to the clinic to have their cuts and bruises treated. These results showed that the school clinic has an additional advantage over and above those for which it was originally intended, i.e. that children use it as a means of substituting physical for psychological ailments.

**Key words:** school clinic, adaptation to school-life, self-awareness, primary school children

### 問題および目的

社会環境の変化に伴い、不登校や校内暴力、非行、いじめ、無気力など、子どもに関わる問題が大きく取り上げられているなか、学校における保健室の役割が注目されている。保健室は本来、「けがの手当」や「体調が悪くなったとき、一時的に休養する」など救急看護的な処置をする場所である。しかし、社会環境や生活環境に関わる子どもの精神健康問題が増加するに伴い、保健室に求められているものが変化してきている。たとえば、日本子どもを守る会（1993）の報告によれば、発育・健康状態の相談の中でも、じっくり話を聞く必要がありそうな心の悩みを根底に

かかえるケースが、小学校では8.3%、中学校で15.6%、高校で17.3%にもものぼるといふ。そこには、心の悩みを身体の異常で訴えざるを得ない子どもたちの様子が見えてくる。

現代の子どもたちが示す「不適応」のサインには、大きく分けて三つの方向があるといわれる。その第一は、「外化」つまり、「外に向かって行動の形で表現されるもの」で、家庭内暴力なり学校内暴力という破壊的な形をとったり、いわゆる「非行」といわれるところの、従来「反社会的」と形容されたものが、その中心である。第二は、「身体化」つまり、「身体に表現されるもの」であり、「身体病」や「身体症状」の形態をとるものをいう。そして第三は、「内化」であり、「専ら内に閉じ込めってしまうもの」で、従来言われた「非社会的」なものや、登校拒否、学校恐怖症などといわれるものがその中核である。

保健室の場合は、この中で二番目の身体化に関わり、学校不適応を身体症状に訴えて保健室を訪れることになる。平山・仲田・識名（1992）は、このように身体面、精神面、行動面の三つに分けられる不適応兆候の中でも、学校不適応の子どもが多くが身体面での不適応兆候を示してくるといふ。そして、学校不適応からもたらされる悩みと身体症状との関連を検討したところ、悩みの内容をもとに算出された「悩みスコア」が高いものは身体症状も多く、頻回に訴えている傾向にあることがわかっている。このように、保健室に来室する子どもの中には、学校への不適応を身体へ表現する者が少なからずいると考えられる。このような不適応が症状として固定化したり、さらに心身症へと進行しないうちに予防することは、今日の学校保健上の重要な課題となっている。

一方で、なぜ不適応が身体化として現れてくるのかという問題については、「自分の内面を見つめる力や、それを言語化する力がまだ未熟な子どもたちは、なかなか苦しみを語ってくれない」という中坊（1995）の指摘が参考となろう。

Fenigstein, Scheier & Buss（1975）によれば、自己意識は、①他者からは観察できないプライベートな自己への注意の焦点づけ傾向と解される「私的自己意識（private self-consciousness）」と②他者からも観察可能なパブリックな自己を意識する傾向である「公的自己意識（public self-consciousness）」、および、③自己意識にともなって生じる対人不安と見なしうる「社会的不安（social anxiety）」、の3因子に分化するという。その中でも、私的自己意識については、Gibbons, Carver, Scheier & Hormuth（1979）が「私的自己意識によって自己の知識はより明瞭になる」ということを見いだしており、私的自己意識の高い人は内省的で、自己についての知識をより精緻化していると考えられる。さらに、Turner（1978）は、被験者に自己の特性を表わす形容詞を書き出すように求めると、私的自己意識の高い被験者は、自己記述語をより多く、より速く書き出すことができたと報告しているし、Scheier, Buss & Buss（1978）も、私的自己意識の高い人は自己を正確に認知することを見いだしている。これらの結果から、私的自己意識が内面を見つめる力となっているといえよう。

そして、この自己意識の発達分化については、辻（1993）が、公私の未分化な自己意識は、小学生の低学年の段階で既に分化しはじめるが、その後の公的自己意識と私的自己意識の分化は同

時平行的には進まないと述べている。その具体的な内容を述べてみると、中学年くらいになって、まず未分化な自己の意識から公的自己意識が分化し始め、他者に観察され規定される「社会的対象としての公的自己の意識」が初めに明瞭になってくるという。しかしこの時点では、まだ私的自己の意識は、はっきりとした形では見られず、公的自己意識がはっきりした後に、つまり思春期ないしは前思春期（小学校高学年）のころから、公的自己意識とは区別されるものとして発達してくるという。後藤・辻（1980）も、児童用自己意識尺度は、「社会的不安」「公的自己意識」「私的自己意識」の明快な3因子構造とはならなかったと報告し、児童においては自己意識の発達が未分化であることを示している。つまり、そうした私的な自己意識に乏しい子ども、つまり内省力の乏しい子どもが言語化の代償として身体症状を示すと推測される。つまり、高学年になってそろそろ私的自意識が現れなければならない子が、それができず、さらに自分も主張できずに、それを身体症状という形でもって保健室に助けを求めてくると言えないだろうか。

では、子どもたちが悩みを身体化させてやってくる保健室とは、学校という組織の中でどのような存在なのだろうか。服部（1995）は、保健室の置かれたこのような状況について以下のような特徴を述べている。まず一つめは、学校であって学校でない場所としてである。保健室登校をしている子どもにとって保健室は学校内にありながら、いわゆる学校とは違う場所である。保健室が「駆け込み寺」と呼ばれるのは、子どもが苦しくて耐えられないとき、ここに駆け込めばほとと一息ついて心を安心させておくことができるからである。このような保健室の役割に対して、一方では逃避や甘えといった否定的な味方や批判もあるものの、今日の学校が置かれている状況において、学校内にこうした独特の空間が存在する意義は大きい。二つめに、いろいろな目的で行ける場所である。保健室は、けがの手当をしたり、体調の悪いとき休養したりするだけでなく、友達に付き添っていたり、あるいは“何となく”訪れて養護教諭に話を聞いてもらったりすることができる場所でもある。このように、保健室は、体調の悪いときに休む場所や、けがの応急処置をしてくれる場所であるだけでなく、憩いの場であり、安心できる場として存在価値がある。つまり保健室は自由度の高い多目的な部屋というわけである。

従って、そこで働く養護教諭の存在意義も大きい。服部（1995）よれば、子どもは「養護の先生は先生だけれど、普通の先生ではない。だから気持ちを話しやすい」と述べるという。また「養護の先生」は試験の結果などの数値で自分たちを評価しないことが、担任とは違う安心感をもたらしている。

このように何らかの学校不適応感をもっていたり、自分の内面を見つめたり、言語化する力がまだ未熟な子どもたちは、気持ちを語れないものの、受け入れてくれそうな保健室に、全身倦怠感や頭痛、腹痛などの身体症状にかこつけては、悩みのシグナルを発している。実際には心に問題があったとしても、まずは体の具合が悪いという方が、受け入れてもらえやすい。その場合、保健室に来室した子どもは、当初は心理的援助を受けているとは思っていないし、養護教諭の方もそういう意識は希薄である。しかし、いつのまにか心の相談にのっているという関わりを養護

教諭が取っている。

以上述べてきたように、本研究では、保健室の意義をさぐるうえから、保健室を訪れる子どもに着目し、学校生活の適応という点と、自己意識の発達という点の二つの観点から探ってみたい。そして、自己意識の分化が生じるとされる小学校高学年を対象として、保健室の利用状況に学校生活の適応と自己意識がいかに関与しているかをさぐる。研究を進める上で、本研究では、まず保健室の利用状況を明らかにし、これと学校生活適応と自己意識との関連について調べていく。

## 予備調査 1

### (1) 問題および目的

高瀬・内藤・浅川・古川(1986)は、高校生の自分の学校に対する適応感を、幅広い範囲で測定する尺度として「学校生活適応尺度」を作成している。これは、学習意欲、友人関係、進路意識、教師関係、規則への態度、特別活動への態度、の6つの領域についての適応感を取り扱っているもので36項目からなり、高校生を対象としている。しかし、本調査の調査対象者は小学6年生であり、高校生とは環境も違うため、高瀬ら(1986)の作成した「学校生活適応尺度」に小学生用を修正したり、必要な項目を新たに加えることを目的とした。

### (2) 方法

#### ① 調査対象者

山口大学教育学部生62名(男子28名、女子34名)

#### ② 調査期間

平成9年11月中旬

#### ③ 手続き

「小学6年生の児童が、学校生活に適応できているかどうかを知ることができる項目」を無記名方式で、自由に記述してもらった。

### (3) 結果および考察

小学6年生の学校生活の適応感を測定する項目として125項目が挙げられた。そこで、高瀬ら(1986)の作成した「学校生活適応尺度」の項目と重複する6項目を省いた。さらに、5名以上が回答している9項目、つまり、・私は、学校へ行くのが楽しいと思う。(16)・私は、先生が好きである。(9)・私には、とても仲の良い友達がいる。(6)・私には、好きな教科がある。(6)・私は、給食の時間が楽しみである。(6)・私は、学校にいて楽しいと思う。(6)・私は、みんなの役に立っている。(5)・私は、休み時間や昼休みが楽しみである。(5)・私は、今のクラスが好きだ。(5)(( )内は、回答者数)を高瀬ら(1986)の「学校生活適応尺度」に新たに加える項目として採用した。

## 予備調査 2

### (1) 問題および目的

高瀬ら(1986)の「学校生活適応尺度」は、高校生を対象としているため本調査の対象者である小学6年生の児童とは環境が異なり、またこの項目内容を小学6年生の児童が理解するのは困難であると思われる。したがってこの予備調査2では、高瀬ら(1986)の作成した「学校生活適応尺度」に予備調査1で得た9項目を加えた計45項目を、小学6年生の環境に合わせ、また、項目内容を理解できるように訂正することを目的とする。

そして、本調査で用いる後藤・辻(1980)の作成した、社会的不安、自己内省、公的自己意識の3因子からなる「児童用自己意識尺度」についても、小学6年生の児童が項目内容を理解できるように訂正した。

### (2) 方 法

#### ① 調査対象者

山口大学大学院教育学研究科在籍大学院生1名

山口県教育委員会派遣長期研修生1名

(両者とも現職の小学校教諭である。)

#### ② 調査期間

平成9年11月下旬

#### ③ 手続き

高瀬ら(1986)の作成した「学校生活適応尺度」に、予備調査1で選出した9項目を加えた結果、計45項目になった。

次に、山口大学教育学部に在籍する小学校教諭2名に、学校生活適応に関する45項目と児童用自己意識尺度の14項目の項目内容の訂正及び削除をしてもらった。

### (3) 結果および考察

学校生活適応に関する45項目の訂正を行なった結果、27項目が内容に訂正があった。また、4項目が進路意識に関する項目であるため、小学生に質問する項目として不適切であるとの観点から削除した。また、児童用自己意識尺度の14項目の訂正を行なった結果、5項目が内容に訂正があった。そして、学校生活適応に関する項目で、訂正前の45項目と、最終的に採用した41項目の内容をTable1に、児童用自己意識尺度の14項目の訂正前と訂正後の内容をTable2に示した。そしてこれらの予備調査で得られた質問項目をもとに、本調査を実施した。

Table 1 学校生活適応に関する項目の訂正前と訂正後

修正前	修正後
<p>1. 私は、勉強に積極的である。</p> <p>2. 私は、性格的に明るい方である。</p> <p>3. 私には、この学校でなんでも相談できる先生がいる。</p> <p>4. 私は、あまり意識なくとも、規則を守るほうだ。</p> <p>5. 私は、将来なりたい職業を決めている。</p> <p>6. 私は、クラブやホームルームや学校行事等に積極的に、一生懸命取り組んでいる。</p> <p>⑦. 私は、給食の時間が楽しみである。</p> <p>8. 私は、勉強の目標をもって、毎日コツコツと努力している。</p> <p>9. 私は、ユーモアのある人間である。</p> <p>10. 私は、この学校の先生と話をする機会をもとうとしている。</p> <p>11. 私は、学校の規則をまじめに守っている。</p> <p>12. 私は、クラブやホームルームや行事に楽しさを感じる。</p> <p>⑬. 私は、学校に行くのが楽しいと思う。</p> <p>14. 私は、授業をよく理解している。</p> <p>15. 私は、人当たりが良く、社交的なほうである。</p> <p>16. 私には、まるで友達のように親しみを感じる先生が、この学校にいる。</p> <p>17. 私は、規則に対して不満がない。</p> <p>18. 私は、ホームルームや行事に、自主的に参加している。</p> <p>⑱. 私は、今のクラスが好きである。</p> <p>20. 私は、ある程度勉強ができるほうだ。</p> <p>21. 私は、明るく、楽しい友人関係をもっている。</p> <p>22. 私は、この学校の先生と気軽に話せる。</p> <p>23. 私は、自分の将来に希望を持っている。</p> <p>24. 私は、好きなクラブに所属し、その活動に充実感をもっている。</p> <p>⑳. 私には、好きな教科がある。</p> <p>26. 私は、この学校の先生を信頼している。</p> <p>㉑. 私は、休み時間や昼休みが楽しみである。</p> <p>28. 私は、勉強が楽しいと思う。</p> <p>29. 私は、多くの友人をこの学校にもっている。</p> <p>⑳. 私は、先生が好きである。</p> <p>31. 私は、家庭学習を毎日時間を決めてやっている。</p> <p>32. 私は、ホームルームや学校行事には、みんなと協力してやっている。</p> <p>㉓. 私は、学校にいて楽しいと思う。</p> <p>34. 私は、先生によく質問する。</p> <p>35. 私は、悩みを聞いてくれたりなんでも話せる友人を、この学校でもっている。</p> <p>36. 私は、学校の規則を守らなければならないという自覚をもっている。</p> <p>㉕. 私は、みんなの役にたっている。</p> <p>38. 私は、この学校に先生に対して素直である。</p> <p>㉖. 私には、とても仲の良い友達がいる。</p> <p>40. 私は、クラブやホームルームや行事を怠けないでまじめにやっている。</p> <p>41. 私は、学校の規則があるのは当たり前だと思う。</p> <p>42. 私は、自分の進路のことを真剣に考えている。</p> <p>43. 私の、進路目標は、明確である。</p> <p>44. 私は、自分にあった進路を考えている。</p> <p>45. 私は、自分の進路について、本や資料などでよく調べる。</p>	<p>1. 私は、勉強に積極的である。</p> <p>2. 私は、性格的に明るい方である。</p> <p>3. 私には、学校になんでも相談できる先生がいる。</p> <p>4. 私は、あまり意識なくとも、きまりを守れるほうだ。</p> <p>5. 私は、将来何になりたいかを決めている。</p> <p>6. 私は、クラブや学級活動や行事などに積極的に、いっしょうけんめい取り組んでいる。</p> <p>⑦. 私は、給食の時間が楽しみである。</p> <p>8. 私は、自分の目標を決めて、毎日コツコツと勉強している。</p> <p>9. 私は、ユーモア（おもしろみ）のある人間である。</p> <p>10. 私は、学校の先生と進んで話をしようとしている。</p> <p>11. 私は、学校のきまりをまじめに守っている。</p> <p>12. 私は、クラブや学級活動や行事に楽しさを感じる。</p> <p>⑬. 私は、学校に行くのが楽しいと思う。</p> <p>14. 私は、授業をよく理解している。</p> <p>15. 私は、人と話をしたりいっしょに活動をしたりするのが好きである。</p> <p>16. 私には、まるで友達のように親しみを感じる先生が学校にいる。</p> <p>17. 私は、学校のきまりに対して不満はない。</p> <p>18. 私は、学級活動や行事に進んで参加している。</p> <p>⑱. 私は、今のクラスが好きである。</p> <p>20. 私は、まあまあ勉強ができるほうだ。</p> <p>21. 私は、明るく楽しく友達と話をしたり遊んだりしている。</p> <p>22. 私は、学校の先生と気軽に話せる。</p> <p>23. 私は、自分の将来に希望を持っている。</p> <p>24. 私は、好きなクラブに入っていて、その活動を熱心にして、まんぞくしている。</p> <p>⑳. 私には、好きな教科がある。</p> <p>26. 私は、学校の先生を信頼している。</p> <p>㉑. 私は、休み時間や昼休みが楽しみである。</p> <p>28. 私は、勉強が楽しいと思う。</p> <p>29. 私は、学校にたくさん友達がいます。</p> <p>⑳. 私は、先生が気に入っている。</p> <p>31. 私は、家庭学習を毎日時間を決めてやっている。</p> <p>32. 私は、学校行事や行事の時は、みんなと協力してやっている。</p> <p>㉓. 私は、学校にいて楽しいと思う。</p> <p>34. 私は、学校の先生によく質問する。</p> <p>35. 私は、悩みを聞いてくれたり、なんでも話せる友達が学校にいる。</p> <p>36. 私は、学校のきまりを守らなければならないと思っている。</p> <p>㉕. 私は、みんなの役にたっている。</p> <p>38. 私は、学校の先生に対してすなおである。</p> <p>㉖. 私には、とてもなかのよい友達がいる。</p> <p>40. 私は、クラブや学級活動や行事をなまけないでまじめにやっている。</p> <p>41. 私は、学校にきまりがあるのはあたりまえだと思う。</p> <p>42. 削除</p> <p>43. 削除</p> <p>44. 削除</p> <p>45. 削除</p>

注) 訂正前の項目番号と訂正後の項目番号は一致している。番号に○がついてある項目は、新たに追加した項目

Table 2 児童用自己意識尺度の訂正前と訂正後

項目番号	訂正前	項目番号	訂正後
1.	自分のことがもっとよくわかるようにいつも努力している。	1.	自分がどんな人間かということを考えることがある。
2.	先生や友達に自分がどう思われているかが気になる。	2.	先生や友達に自分がどう思われているかが気になる。
3.	他の人に見られていると何もできなくなってしまう。	3.	ほかの人に見られていると何もできなくなってしまう。
4.	自分のことをよく反省する。	4.	自分のしたことをよく反省する。
5.	自分がかっこいいかどうか気になる。	5.	自分がかっこいいか(かわいいか)どうか気になる。
6.	他の人の前で話をするとき、心臓がドキドキする。	6.	他の人の前で話をするとき、心臓がドキドキする。
7.	自分のスタイルや顔が気になる。	7.	自分のスタイルや顔が気になる。
8.	知らない人にでも平気で話しかけることができる。	8.	知らない人にでも平気で話しかけることができる。
9.	自分のことなどあまり考えたことがない。	9.	自分のことなどあまり考えたことがない。
10.	家を出る前には、必ず鏡を見る。	10.	家を出る前には、必ず鏡を見る。
11.	はずかしがりやである。	11.	はずかしがりやである。
12.	やる気がするときもしないときも、どうして自分はそういう気になるのかと考えてしまう。	12.	やる気がするときもしないときも、どうして自分はそういう気になるのかと考えてしまう。
13.	どうすれば気に入ってもらえるか、いつも考えている。	13.	どうすれば人に気に入ってもらえるか、いつも考えている。
14.	大勢の人がいるところでは、神経質になってしまう。	14.	大勢の人がいるところではまわりのことが気になってしまう。

注) 訂正前の項目番号と訂正後の項目番号は一致している

## 本 調 査

### (1) 問題および目的

保健室に来室する子どもは、さまざまな理由でさまざまな不定愁訴を訴えているのだが、この子どもたちは、学校生活になんらかの不適応を感じていると思われる。また、中坊(1995)が言うように「自分の内面を見つめる力や、それを言語化する力がまだ未熟な子ども」という面から自己意識の乏しさにも注目することにした。

そこで本調査では、保健室の利用状況を明らかにし、これと学校生活の適応と自己意識との関連について調べることを目的とする。

### (2) 方 法

#### ① 調査対象者

山口県の公立小学校(1校)の6年生、179名(採用者数171名(男子88名、女子83名))

#### ② 調査期間

平成9年12月上旬

③ 手続き

質問紙は次の3つの部分から構成された。

- a) 保健室の利用状況を調べるため、木幡・庄司(1995)の、保健室利用と保健室及び養護教諭のイメージとの関連についての研究で用いられた保健室の利用理由8項目に対して、「あなたは6年生になってから何回保健室に行きましたか。次の質問に対して、その回数を数字で教えてください。」と示し、保健室の利用回数の回答を求めた。「6年生になってから」と期間を限定したのは、一定期間の回数に限定したからである。
- b) 学校生活の適応度を測定するため、予備調査2で項目内容の訂正・削除を済ませた41項目について、「次の質問に対して、あなたはどのくらい当てはまりますか。」と質問し、“まったくそうだ；5”から“ぜんぜんそうでない；1”までの5段階評定で回答を求めた。(質問項目は、Table1の訂正後を参照)
- c) 自己意識を測定するため、予備調査2で項目内容の訂正を済ませた14項目について、「次の質問に対して、あなたはどのくらい当てはまりますか。」と質問し、“まったくそうだ；5”から“ぜんぜんそうでない；1”までの5段階評定で回答を求めた。(質問項目は、Table2の訂正後を参照)

(3) 結果と考察

本調査では、被調査者178名に対して、記入漏れがある者のデータを除いた171名のデータを採用した。

①保健室の利用状況

まず、保健室の利用状況を明らかにするため、利用理由8項目に対しての利用回数範囲ごとの人数と平均を男女別(男子 Table3-1 女子 Table3-2)と全体(Table 3-3)で示した。

Table3-1 保健室の利用状況(男子) <'97.4月上旬~'97.12月上旬>

【N=88】

利用理由	利用人数(人)					平均(回)
	保健室利用回数(回)					
	0	1~5	6~10	11~15	16~20	
からだの具合が悪くて	37	45	4	2	0	1.7
友達につき合って	21	62	5	0	0	2.3
けがの手当のため	32	98	3	0	0	1.5
身長・体重・視力を測る	3	78	7	0	0	3.1
友達や先生とおしゃべり	79	6	2	1	1	0.4
休みたい	77	11	0	0	0	0.3
なんとなく用もないときに	76	11	1	0	0	0.3
気晴らし、気分転換	83	5	0	0	0	0.1



Table3-2 保健室の利用状況（女子）＜'97.4月上旬～'97.12月上旬＞

【N=83】

利用理由	利用人数(人)					平均(回)
	保健室利用回数(回)					
	0	1～5	6～10	11～15	16～20	
からだの具合が悪くて	39	40	2	1	1	1.7
友達につき合っ	10	63	10	0	0	2.9
けがの手当のため	25	54	4	0	0	1.7
身長・体重・視力を測る	5	75	3	0	0	3.3
友達や先生とおしゃべり	68	13	1	1	0	0.7
休みたい	75	8	0	0	0	0.2
なんとなく用もないときに	71	11	0	0	1	0.5
気晴らし、気分転換	74	9	0	0	0	0.3

Table 3-3 保健室の利用状況（全体）＜'97.4月上旬～'97.12月上旬＞

【N=171】

利用理由	利用人数(人)					平均(回)
	保健室利用回数(回)					
	0	1～5	6～10	11～15	16～20	
からだの具合が悪くて	76	85	6	3	1	1.7
友達につき合っ	31	105	15	0	0	2.5
けがの手当のため	57	107	7	0	0	1.6
身長・体重・視力を測る	8	153	10	0	0	3.2
友達や先生とおしゃべり	147	19	3	1	1	0.6
休みたい	152	19	0	0	0	0.2
なんとなく用もないときに	147	22	1	0	1	0.4
気晴らし、気分転換	157	14	0	0	0	0.2

これらは6年生になってからの保健室の利用回数を回答させたため、4月上旬から12月上旬までの、約8カ月間の利用回数である。

まず、その期間一人平均1回以上保健室を利用したものを多い順から並べると、「身長・体重・視力をはかるために」（男子3.1回、女子3.3回、全体平均は3.2回）「友達につき合っ（つきそっで）」（男子2.3回、女子2.9回で、全体平均は、2.5回）「からだの具合が悪くて」（男女ともに1.7回で、全体平均は1.7回）「けがの手当のために」（男子1.5回、女子1.7回で、全体平均は、1.6回）であった。そして、一人平均1回に満たないものは、「友達や先生とおしゃべりをするために」（男子0.4回、女子0.7回で、全体平均は、0.6回）「なんとなく用もないときに」（男子0.3回、女子0.5回で、全体平均は、0.4回）「気晴らし（気分転換）のために」（男子0.1回、女子0.3回で、全体平均は、0.2回）「休みたくて」（男子0.3回、女子0.2回で、全体平均は、0.2回）

次に、利用状況の性差を見るため、両側t検定を行なったが、どの利用理由においても、差は見られなかった。

②学校生活適応に関する41項目の因子構造

学校生活適応に関する41項目の因子構造を明らかにするため、因子分析（主因子解－バリマックス回転）を行なった。因子数は固有値1.0以上の10に指定した。累積寄与率は66.9%であった。Table4に、得られた10因子と、その寄与率と累積寄与率を示した。

Table 4 学校生活適応に関する41項目の因子分析

項目番号	項目	因子負荷量									
		F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	F8	F9	F10
F 1. 学習意欲及び特別活動への態度(固有値10.88, 寄与率26.5%, 累積寄与率26.5%)											
8.	私は、自分の目標を決めて、毎日、コツコツと勉強している。	.66	.09	.12	-.15	.11	.02	.04	.17	.26	-.08
6.	私は、クラブや学級活動や行事などに積極的に、一生懸命取り組んでいる。	.58	.28	.21	.06	.01	.02	.24	.08	.16	.18
1.	私は、勉強に積極的である。	.57	.21	-.15	.06	.29	.04	-.13	.27	.14	-.01
12.	私は、クラブや学級活動や行事に楽しさを感じる。	.55	.16	.23	.22	.05	.17	.14	.01	-.05	.09
28.	私は、勉強が楽しいと思う。	.54	.22	.27	.01	.32	-.04	.18	.20	.11	.12
40.	私は、クラブや学級活動や行事をなまけないでまじめにやっている。	.54	.19	.34	.24	-.04	-.04	.19	.11	.19	.05
18.	私は、学級活動や行事に進んで参加している。	.53	.29	.23	.10	.12	.19	.10	-.05	.06	.17
32.	私は、学級活動や行事のときは、みんなと協力してやっている。	.52	.13	.15	.30	.11	-.02	.16	.22	.11	-.11
14.	私は、授業をよく理解している。	.44	.18	.15	-.03	.20	.02	-.01	.40	.07	.16
31.	私は、家庭学習を毎日時間を決めてやっている。	.42	.00	.28	-.01	.09	.06	.20	.02	.24	-.15
F 2. 教師関係(固有値3.64, 寄与率8.9%, 累積寄与率35.4%)											
16.	私には、まるで友達のように親しみを感じる先生が学校にいる。	.17	.77	-.04	.12	.15	.05	-.03	.01	.15	.10
10.	私は、学校の先生と進んで話をしようとしている。	.24	.73	-.04	.01	.08	.16	.14	.06	-.01	-.04
⑩.	私は、先生が気に入っている。	.05	.68	.38	.08	.21	-.10	.03	.14	.13	.06
22.	私は、学校の先生と気軽に話せる。	.19	.66	-.04	.13	-.06	.17	.23	-.00	-.03	.04
3.	私には、学校になんでも相談できる先生がいる。	.09	.64	.22	-.07	.03	-.13	-.03	.04	.10	.08
26.	私は、学校の先生を信頼している。	.19	.54	.49	.09	.24	-.04	.02	-.06	.13	.11
34.	私は、学校の先生によく質問をする。	.40	.43	.09	.07	.13	.13	.24	.19	-.06	-.01
F 3. 規則に対する考え(固有値2.46, 寄与率6.0%, 累積寄与率41.4%)											
17.	私は、学校のきまりに対して不満はない。	.17	.06	.70	-.03	.08	.02	.10	.04	.09	.09
41.	私は、学校にきまりがあるのは、あたりまえだと思う。	.22	.10	.65	.20	.07	-.10	.01	.01	.03	-.01
36.	私は、学校のきまりを守らなければならないと思っている。	.25	.03	.57	.17	.09	-.16	.04	.09	.27	.04
38.	私は、学校の先生に対してすなおである。	.11	.39	.52	.12	.12	.02	.05	.22	.29	-.06
F 4. 友人関係(固有値2.22, 寄与率5.4%, 累積寄与率46.8%)											
⑨.	私には、とてもなかのよい友達がいる。	-.04	.04	.08	.80	.05	.20	-.01	.13	.04	.05
35.	私は、なやみを聞いてくれたり、なんでも話せる友達が学校にいる。	.08	.22	.16	.55	.17	.08	.03	-.14	-.04	.05
29.	私は、学校にたくさんの友達がいる。	.12	-.03	.15	.51	.32	.11	.13	.16	.11	.05
15.	私は、人と話したりいっしょに活動したりするのが好きである。	.18	.06	-.18	.42	.24	.29	.22	-.13	-.21	-.01
21.	私は、明るく楽しく友達と話をしたり遊んだりしている。	.07	-.06	.07	.36	.14	.34	.20	-.02	-.03	.01
F 5. 学校での居心地よさ(固有値2.01, 寄与率4.9%, 累積寄与率51.7%)											
⑬.	私は、学校へいくのが楽しいと思う。	.24	.23	.25	.20	.68	.16	.04	.19	-.00	-.08
⑭.	私は、学校にいて楽しいと思う。	.23	.27	.14	.39	.63	.08	.15	.13	.02	-.04
⑮.	私は、いまのクラスが好きである。	.13	.10	.09	.25	.57	-.02	.28	.05	.04	.10
F 6. 明朗性(固有値1.46, 寄与率3.6%, 累積寄与率55.3%)											
9.	私は、ユーモア(おもしろみ)のある人間である。	.06	.13	-.04	.18	.01	.83	.05	.15	-.14	.12
2.	私は、性格的に明るい方である。	.06	.03	-.14	.21	.05	.72	.13	.03	.02	.10
F 7. 授業外の楽しみ(固有値1.39, 寄与率3.4%, 累積寄与率58.7%)											
⑰.	私は、休み時間や昼休みが楽しみである。	.05	.15	.06	.16	.16	.09	.60	-.00	.03	.08
⑱.	私は、給食の時間が楽しみである。	.10	.01	-.06	-.00	.05	.16	.54	.15	.10	.10
24.	私は、好きなクラブに入っていて、その活動を熱心にして、満足している。	.31	.04	.26	.14	.04	-.04	.45	.04	-.03	.17
⑳.	私には、好きな教科がある。	.27	.18	.17	-.02	.10	.01	.36	.03	-.05	.20
F 8. 集団内自信(固有値1.25, 寄与率3.0%, 累積寄与率61.7%)											
㉑.	私は、みんなの役にたっている。	.14	.06	.20	.08	-.01	.23	.20	.77	.09	-.03
20.	私は、まあまあ勉強ができる方だ。	.30	.05	-.04	.02	.20	-.03	.04	.64	.02	.06
F 9. 規則遵守(固有値1.13, 寄与率2.7%, 累積寄与率64.5%)											
4.	私は、あまり意識しなくても、きまりを守る方だ。	.30	.16	.18	.06	-.07	-.15	.09	.11	.73	-.06
11.	私は、学校のきまりをまじめに守っている。	.27	.16	.31	-.06	.13	-.07	.01	.01	.67	.03
F 10. 将来の希望(固有値1.01, 寄与率2.5%, 累積寄与率66.9%)											
5.	私は、将来何になりたいかを決めている。	-.01	.04	.00	-.00	.04	.14	.12	-.05	-.04	.83
23.	私は、自分の将来に希望を持っている。	.13	.16	.19	.13	-.04	.06	.24	.14	.01	.67

※○印は、付加項目

第1因子は、「私は、自分の目標を決めて、毎日コツコツと勉強している」・「私は、クラブや学級活動や行事などに、一生懸命取り組んでいる」などの項目から『学習意欲及び特別活動への態度』と命名した。第2因子は、「私には、まるで友達のように親しみを感じる先生が学校にいる」・「私は、学校の先生と進んで話をしようとしている」などの項目から『教師関係』と命名した。第3因子は、「私は、学校のきまりに対して不満はない」・「私は、学校にきまりがあるのは、あたりまえだと思う」などの項目から『規則に対する考え』と命名した。第4因子は、「私には、とてもなかのよい友達がいる」・「私には、悩みを聞いてくれたり、なんでも話せる友達が学校にいる」などの項目から『友人関係』と命名した。第5因子は、「私は、学校に行くのが楽しいと思う」・「私は、学校にいて楽しいと思う」などの項目から『学校での居心地よさ』と命名した。第6因子は、「私は、ユーモア（おもしろみ）のある人間である」・「私は、性格的に明るい方である」の2項目から『明朗性』と命名した。第7因子は、「私は、休み時間や昼休みが楽しみである」・「私は、給食の時間が楽しみである」などの項目から『授業外の楽しみ』と命名した。第8因子は、「私は、みんなの役に立っている」・「私は、まあまあ勉強できる方だ」の2項目から『集団内自信』と命名した。第9因子は、「私は、あまり意識しなくても、決まりを守れる方だ」・「私は、学校のきまりをまじめに守っている」の2項目から『規則遵守』と命名した。第10因子は、「私は、将来何になりたいかを決めている」・「私は、自分の将来に希望を持っている」の2項目から『将来の希望』と命名した。

### ③自己意識に関する14項目の因子構造

自己意識に関する14項目の因子構造を明らかにするため、因子分析（主因子解—バリマックス回転）を行なった。因子数は固有値1.0以上の4に指定した。累積寄与率は58.2%であった。Table5に、得られた4因子と、その寄与率と累積寄与率を示した。

Table 5 自己意識に関する14項目の因子分析

項目番号	項 目	因 子 負 荷 量			
		F1	F2	F3	F4
F 1. 社会的不安 (固有値4.00, 寄与率28.6%, 累積寄与率28.6%)					
6. ほかの人の前で話をするとき、心臓がドキドキする。		.76	.06	.02	.03
11. はずかしがりやである。		.74	.05	-.15	.15
3. ほかの人に見られていると何もできなくなってしまう。		.67	.03	.24	.08
14. 大勢の人がいるところではまわりのことが気になってしまう。		.59	.19	.35	.02
13. どうすれば人に気に入ってもらえるか、いつも考えている。		.45	.24	.37	.42
F 2. 公的自己意識 (固有値1.85, 寄与率13.2%, 累積寄与率41.8%)					
7. 自分のスタイルや顔が気になる。		.25	.78	.22	.13
5. 自分がかっこいいか (かわいいか) どうか気になる。		.08	.76	.28	-.00
10. 家を出る前には、必ず鏡を見る。		-.04	.73	-.23	.11
F 3. 積極型私的自己意識 (固有値1.18, 寄与率8.4%, 累積寄与率50.2%)					
1. 自分がどんな人間かということを考えることがある。		.01	.34	.65	.23
4. 自分のしたことをよく反省する。		.22	-.17	.57	-.10
* 8. 知らない人にも平気で話しかけることができる。		.39	-.24	.45	-.01
F 4. 不安型私的自己意識 (固有値1.12, 寄与率8.0%, 累積寄与率58.2%)					
* 9. 自分のことなどあまり考えたことがない。		-.10	.05	-.20	-.80
12. やる気がするときもしないときも、どうして自分はそういう気になるのかと考えてしまう。		.35	.07	.27	.62
2. 先生や友達に自分がどう思われているかが気になる。		.31	.22	.49	.54

注) \*印は、逆転項目

第1因子は、「ほかの人の前で話をするとき、心臓がドキドキする」・「はずかしがりやである」・「他の人に見られていると何もできなくなってしまう」などの項目から『社会的不安』と命名した。第2因子は、「自分のスタイルや顔が気になる」・「自分がかっこいいか（かわいいか）どうか気になる」・「家を出る前には、必ず鏡を見る」の3項目から『公的自己意識』と命名した。第3因子は、「自分がどんな人間かということを考えることがある」・「自分のしたことをよく反省する」「知らない人にでも平気で話しかけることができる」の3項目から『積極的私的自己意識』と命名した。第4因子は、「自分のことなどあまり考えたことがない」・「やる気がするときもしないときも、どうして自分はそういう気になるのかと考えてしまう」・「先生や友達に自分がどう思われているかが気になる」の3項目から『不安型私的自己意識』と命名した。

④学校生活適応と自己意識と、保健室の利用状況との関連

学校生活適応と自己意識が、保健室の利用状況にどのように影響しているかを明らかにするために、学校生活適応の10因子と自己意識の4因子を説明変数にし、保健室の利用理由8項目に対する利用頻度を基準変数とする重回帰分析（一括投入法）を行なった。その結果、得られた重相関係数（R）と決定係数（R<sup>2</sup>）と標準偏回帰係数（β）を、Table6に示した。

Table6 学校生活適応と自己意識を説明変数にし、保健室の利用理由に対する利用頻度を基準変数とした重回帰分析 — 一括投入法による標準偏回帰係数β—

	基準変数 説明変数	からだの具合 が悪くて	友達につき合 って	けがの手当の ために	身長・体重・視力を 測るために	おしゃべりを するために	休みたくて	何となく用も ないときに	気晴らしの ために
学校 生活 適 応	F1 学習意欲及び特別活動への態度	.057	.030	-.004	.166	.076	.048	.050	.032
	F2 教師関係	.115	.079	-.043	.046	.187*	.130	.158*	.213**
	F3 規則に対する考え	-.130	-.267**	-.093	.046	-.121	-.117	-.032	.061
	F4 友人関係	-.002	.072	.054	.099	-.102	-.028	.098	-.015
	F5 学校での居心地よさ	.072	.054	.063	.009	-.025	-.140	-.217**	-.125
	F6 明朗性	.162	.202*	.188*	.068	.040	.056	.152	-.005
	F7 授業外の楽しみ	-.147	-.128	-.164*	.023	-.073	-.115	-.073	-.161*
	F8 集団内自信	-.147	-.155	-.003	-.084	-.080	-.072	-.038	-.047
	F9 規則遵守	.086	.003	.014	-.033	.100	.051	.031	.092
	F10 将来の希望	-.022	.064	.141	.071	.044	.070	.104	.126
自 己 意 識	F1 社会的不安	.054	-.058	-.059	.121	-.066	.047	.002	.019
	F2 公的自己意識	-.043	-.053	-.012	-.003	-.078	-.086	-.130	.067
	F3 積極型私的 自己意識	-.162	-.134	.189*	-.162	-.164	-.096	-.187*	-.211*
	F4 不安型私的 自己意識	.074	.031	-.099	.033	-.052	-.053	.020	-.016
	重相関係数 R	.370	.445	.366	.271	.364	.320	.420	.421
	決定係数 R <sup>2</sup>	.137	.198	.134	.074	.133	.102	.176	.177

注) \* p < .01    \* p < .05

「からだの具合が悪くて、保健室に行く」についてみると、重相関係数は $R = .370$ 、決定係数は $R^2 = .137$ で、どの変数にも有意に高いものは見られなかった。

「友達につき合って（付き添って）保健室に行く」についてみると、 $R = .445$ 、 $R^2 = .198$ で、説明変数の結果を見ると、「明朗性」が有意に正（ $\beta = .202, p < .05$ ）の、「規則に対する考え」が有意に負（ $\beta = -.267, p < .01$ ）の標準偏回帰係数を示した。明朗性が高いほど、また規則に対する考え（規範）が低いほど、友達につき合って（付き添って）保健室に行く頻度が高くなることがわかった。つまり、活発なゆえに世話好きで、しかもそれは学校という規範を時には破るほどに世話好きということであろうか。

「けがの手当のために、保健室に行く」についてみると、 $R = .366$ 、 $R^2 = .134$ で、説明変数の結果を見ると、「明朗性」と「積極型私的自己意識」が有意に高い正（ $\beta = .188, p < .05$ ・ $\beta = .189, p < .05$ ）の、「授業外の楽しみ」が有意に高い負（ $\beta = -.164, p < .05$ ）の標準偏回帰係数を示した。つまり「明朗性」と「積極型私的自己意識」が高いほど、「授業外の楽しみ」が低いほど、けがの手当のために保健室に行く頻度が高くなることがわかった。このことから、明るくて自分を振り返ることのできる子は、授業以外の楽しみを見いだせないほど、けがを理由にやってくることになる。これらの子は、授業にはよく乗っている子であろうが、それ以外の遊びがないゆえに、けがという正当な理由にかこつけては保健室を訪れるのではなかろうか。

「身長・体重・視力をはかるために、保健室に行く」についてみると、 $R = .271$ 、 $R^2 = .074$ で、どの説明変数にも有意に高いものは見られなかった。

「先生や友達とおしゃべりをするために、保健室に行く」についてみると、 $R = .364$ 、 $R^2 = .133$ で、説明変数の結果を見ると、「教師関係」の標準偏回帰係数が有意に高く（ $\beta = .187, p < .05$ ）、「教師関係」がよいほど、先生や友達とおしゃべりをするために保健室に行く頻度が高くなることがわかった。このおしゃべりは単に関係の良さを示すものであろう。

「休みたくて、保健室に行く」についてみると、 $R = .320$ 、 $R^2 = .102$ で、どの説明変数にも有意に高いものは見られなかった。

「何となく用もないときに、保健室に行く」についてみると、 $R = .420$ 、 $R^2 = .176$ で、説明変数の結果を見ると、「教師関係」が有意に正（ $\beta = .158, p < .05$ ）の、「学校での居心地よさ」と「積極型私的自己意識」が有意に負（順に、 $\beta = -.217, p < .01$ ・ $\beta = -.187, p < .05$ ）の標準偏回帰係数を示し、「教師関係」がよいほど、また「学校での居心地よさ」や「積極型私的自己意識」が低いほど、何となく用もないときにでも保健室に行く頻度が高くなることがわかった。これは人なつっこい反面、内面に不安をかかえている場合にフラッと訪れてしまうのではなかろうか。

「気晴らし（気分転換）のために保健室に行く」についてみると、 $R = .421$ 、 $R^2 = .177$ で、説明変数の結果を見ると、「教師関係」が有意に高い正（ $\beta = .213, p < .01$ ）の、そして「授業外の楽しみ」と「積極型私的自己意識」が有意に高い負（順に、 $\beta = -.161, p < .05$ ・ $\beta = -.211,$

p<.05)の標準偏回帰係数を示した。つまり「教師関係」がよく、「授業外の楽しみ」や「積極型私的自己意識」が低いほど、気晴らし(気分転換)のために保健室に行く頻度が高くなることがわかった。授業外の楽しみとは、友人との語らいなどの自発的にとりもつ行為のことであろうし、それが低いほど、さらには自分がかめれないほど、教師には親近感をもっているゆえ教師に近い養護教諭に語らいを求めるのであろう。

これらの結果をさらに簡潔に示すため、保健室の利用理由を因子分析し、学校生活適応の10因子と自己意識の4因子を説明変数にし、保健室の利用理由の因子得点を基準変数とする重回帰分析を行った。まず、因子分析の結果では、主成分分析から固有値1以上の3因子が抽出され、バリマックス回転を実施した。

Table 7 保健室の利用理由における因子分析

項 目	因 子 負 荷 量		
	F1	F2	F3
<b>F1 副次利用理由因子</b>			
気晴らしのために	.910	.094	-.011
友達や先生とおしゃべりをするために	.847	.260	-.097
休みたくて	.839	.062	.120
なんとなく用もないときに	.837	.013	-.002
<b>F2 本来利用理由因子</b>			
けがの手当のために	-.021	.794	-.053
友達につきあって	.121	.790	.017
からだの具合が悪くて	.447	.525	.116
<b>F3 形式利用理由因子</b>			
身長・体重・視力を測るために	.010	.007	.990

その結果、Table 7のように、『副次利用理由因子』(気晴らし(因子負荷量0.910)、おしゃべり(0.847)、休みたくて(0.839)、なんとなく(0.837))と『本来利用理由因子』(けがの手当で(0.794)、友達につき合っ(0.790)、からだの具合(0.447))、そして『形式利用理由因子(身長・体重・視力を測るために(0.990))に分けられた。

Table 8 学校生活適応と自己意識の因子を説明変数として保健室利用理由因子を基準変数とした場合の重回帰分析の結果（一括投入法による標準偏回帰係数 $\beta$ ）

説明変数		基準変数		
		F1 副次利用因子	F2 本来利用因子	F3 形式利用因子
学校生活適応	F1学習意欲及び特別活動への態度	.058	.022	.163 <sup>†</sup>
	F2教師関係	.206*	.023	.047
	F3規則に対する考え	-.037	-.225*	.032
	F4友人関係	-.041	.047	.100
	F5学校での居心地よさ	-.145 <sup>†</sup>	.115	.008
	F6明朗性	.025	.244**	.075
	F7授業外の楽しみ	-.101	-.184*	.015
	F8集団内自信	-.068	-.109	-.096
	F9規則遵守	.088	.026	-.031
	F10将来の希望	.064	.077	.057
自己概念	F1社会的不安	.021	-.055	.136
	F2公的自己意識	-.056	-.028	-.007
	F3積極的私的自己意識	-.212*	.008	-.172 <sup>†</sup>
	F4不安型私的自己意識	-.014	-.015	.046

\*\* p<.01 \*p<.05 †p<.10

重回帰分析の結果、Table 8のように、副次利用理由因子とは、教師関係が正（ $\beta = 0.206$ ）の、積極的私的自己意識が負（ $\beta = -0.212$ ）の有意な偏回帰係数を示し、学校での居心地よさが負の傾向（ $\beta = -0.145$ ）を示した。さらに、本来利用理由因子とは、明朗性が正（ $\beta = 0.244$ ）の、規則に対する考え（ $\beta = -0.225$ ）と、授業外の楽しみ（ $\beta = -0.184$ ）が負の偏回帰係数を示した。そして、形式利用理由因子とは学習意欲が正（ $\beta = 0.163$ ）の、積極的私的自己意識が負（ $\beta = -0.172$ ）の傾向にある偏回帰係数を示した。加えて、副次利用理由因子と本来利用理由因子とは、負の相関（ $r = -0.300$ ）にあった。つまり、保健室の本来でない副次的な理由にかこつけて保健室を訪れる児童は、教師に対しては親しみを感じているものの、自分を強くもっておらず、居心地もよくないと思われる。一方で、本来の目的で保健室を訪れる児童は、明るい性格であるものの、授業外の楽しみが低く、規則を受け入れることが低い。つまり、教室とは違う居場所を求めて保健室を訪れると言えるのではないか。

#### (4) 総合考察

保健室に利用状況の結果を見ると、どの利用理由に対しても、頻繁に保健室を利用している者はおくわすかであることがわかった。学校における「自分の居場所」が、保健室である者もいれば、教室である者もいるだろう。ただ、ほとんどの利用理由に対して保健室の利用回数が“0回”の者が多いのに対し、「身長・体重・視力を測るために」保健室に行った回数が“2回”と“4回”の者が多いことには、被調査者の学校は、成長測定が学期ごとにあり、6年生になって

も2回の成長測定を受けており、その点は差し引いて考えねばならない。逆に、友達や先生とおしゃべりをしたり、気晴らしや気分転換のために保健室に行ったり、何となく用もないときや休みたいたきに保健室に行ったりする子どもの人数は多いとは言えないが、そういう子どもの存在の方に注目しなければならない。

次に、「学校生活適応に関する41項目」と「自己意識に関する14項目」それぞれの因子分析結果については、「自己意識に関する14項目」を因子分析した結果、4因子が抽出された。後藤・辻ら(1980・1989)の行なった研究では、小学生を対象とした場合は曖昧な3因子構造(社会的不安・自己内省・公的自己意識)となったが、中学生・高校生を対象とした場合は、明快な3因子構造(公的自己意識・社会的不安・私的自己意識)となっている。これに対し本研究では、「社会的不安」と「公的自己意識」に関しては明快な因子構造となったが、「私的自己意識」に関しては曖昧な因子構造となった。このことは、辻(1993)の、「公的自己意識」がはっきりした後で、小学校高学年の頃から「私的自己意識」は発達してくる、という自己意識の発達分化についての考えを反映している。つまり、被調査者は私的自己意識の発達段階であるといえ、Buss(1980)の、「公的自己意識」が「社会的不安」に大きく寄与している、という考えから、「社会的不安」と「公的自己意識」が同時に発達することが考えられる。そう考えると、この2因子が明快な因子構造となったことは納得できる。

次に、学校生活適応の10因子と自己意識の4因子を説明変数にし、保健室の利用理由8項目に対する利用頻度を基準変数とする重回帰分析の結果について考察してみる。

重回帰分析には、一括投入法を用いた。どの基準変数においても重相関係数は低く、回帰式の当てはまりは良いとは言えないが、標準偏回帰係数が有意に高いものを見ると、次のことが言える。

まず、「教師との関係が良いほど、おしゃべりや気晴らし(気分転換)のために保健室に行くことが多くなる」ということが言える。ここに教師には話せないが、教師に近い養護教諭には身体症状にかこつけて話してはストレスを発散させている様子がうかがえる。ここで、教師との関係の項目の“先生”と、保健室の利用理由の“先生”が必ずしも一致していないことは問題として残るが、“教師との関係”を“養護教諭を含めた教師一般との関係”と捉えるならば、教師との関係が良いと、おしゃべりや気晴らしのために保健室に行くということも考えられる。

次に、「学校での居心地よさが低いほど、何となく用もないときに保健室に行くことが多くなる」ということが言える。教室にいて楽しいと思わない子どもが保健室に行くことが多いことは、まさに今言われている「保健室登校」に関係してくることはないだろうか。こういう子どもたちは、保健室を「自分の居場所」としているのではないだろうか。

また、「明朗性が高いほど、けがの手当のために保健室に行くことが多くなる」ということが言える。活発な子どもには明朗性の高い子どもが多いと考え、明朗性の高い子どもは確かにけがをすることも多くなるであろう。そして、「授業外の楽しみが低いほど、気晴らし(気分転



換)のために保健室に行くことが多くなる」ことから、活発ながら授業以外の楽しみの低い子は、うがった見方かもしれないが、活発さゆえの「けが」という自分の特徴に見合った理由にかこつけて保健室を訪れることも考え得る。さらに休み時間や昼休みが楽しくない子どもにとっても、けがということにかこつけて保健室を息抜きの場に行っているのではなかろうか。

最後に、「積極型私的自己意識が低いほど、何となく保健室に行ったり、気晴らしのために保健室に行ったりすることが多くなる」ということが言える。これは、中坊(1995)が言っている「自分の内面を見つめる力や、それを言語化する力がまだ未熟な子どもたちは、なかなか苦しみ語ってくれない」ということから考えると、私的自己意識の未熟な子どもたちは、悩みや苦しみを認知することができなかつたり、それを言語化することが困難であったりするがゆえ、何となく保健室に行ったりするのではないか。もっと言えば、比較的心を開きやすい養護教諭と話したりすることで、気分を晴らしているのではないだろうか。

これらの結果から、保健室を訪れる児童は何らかの不適応から訪れていることがわかり、副次的な利用理由で訪れる児童は自分自身の問題、特に積極的自己意識の低さから、また本来の利用理由で訪れる児童は、授業外で楽しめないことから、活発さの延長としてのけがという理由にかこつけては保健室を訪れることがわかる。

このように保健室を本来の利用目的とは違った目的で訪れては、それによって救われている子どもがいることにも留意すべきであろう。

## 引用文献

- Buss, A.H. 1980 *Self-consciousness and social anxiety*. San Francisco: Freeman & Company.
- Fenigstein, A., Scheier, M.F., & Buss, A.H. 1975 Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- Gibbons, F.X., Carver, C.S., Scheier, M.F., & Hormuth, S.E. 1979 Self-focused attention and the placebo effect: Fooling some of the people some of the time. *Journal of Experimental Social Psychology*, 15, 263-274.
- 後藤容子・辻 平治郎 1980 肥満児の研究(2) -Self-consciousnessについて- 日本心理学会第44回大会発表論文集, 491
- 服部祥子 1995 養護教諭をどう育てるか こころの科学第64号 日本評論社 Pp.30-35
- 平山清武・仲田行克・識名節子 1992 小児医学 Vol.25, No.3, 397-411
- 木幡美奈子・庄司一子 1995 中学生の保健室および養護教諭に対するイメージと保健室利用に関する研究 教育相談研究, Vol.33, 25-39
- 中坊伸子 1995 こころの失調、からだの失調 こころの科学第64号 日本評論社 Pp.40-44

日本子どもを守る会(編) 1993 子ども白書 1993年度版—子ども参加と子どもの権利条約 —  
草土文化

Scheier, M.F., Buss, A.H., & Buss, D.M. 1978 Self-consciousness, self-report of  
aggressiveness, and aggression. *Journal of Research in Personality*, 12, 133-140.

高瀬克義・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 1986 青年期の環境移行と適応過程(1) 日本教  
育心理学会第28回総会発表論文集, 556-557

辻 平治郎 1993 自己意識と他者意識 北大路書房 Pp.52-131

Turner, R.G. 1978 Self-consciousness and speed of processing of self-relevant  
information. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 4, 456-460.

## 注

- 1) 本研究は、織田(旧姓宮尾)優子の平成9年度の卒業論文のデータを追加分析し、加筆修正したものである。